

道元禪師における「仏祖」の一考察

神戸 信 寅

はじめに

道元禪師（以下、禪師）は、『正法眼蔵』「仏祖」の巻において、

それ仏祖の現成は、仏祖を拏拏して奉覲するなり。過
現当来のみならず、仏向上よりも向上なるべし。ま
さに仏祖の面目を保任せるを拏拏して、礼拝し相見す。

仏祖の功德を現拏せしめて住持しきたり、体証しきた
れり。¹⁾

と、その劈頭に述べている。仏祖を現成することは、仏祖
の名号を拏唱し礼拝供養することである。このことによ
り、過去現在未来の諸仏に限らず、仏向上よりも、更に仏

道元禪師における「仏祖」の一考察（神戸）

向上し続けていくことである。²⁾ まさに仏祖の面目を保任
し、仏祖の名号を拏唱し礼拝供養して、仏祖に相見し住持
することにあるとしている。そこで、仏祖の功德を現成せ
しめ、住持し体証して、正伝してきたところの過去七仏、
西天二十八祖、東土二十二祖の計五十七の仏祖名をあげて
いる。

ところで、五十七の仏祖名が、過去仏においては過去仏
大和尚、現前仏においては釈迦牟尼仏大和尚、未来へ正伝
を担う祖師においては歴代祖師大和尚というように、全て
に大和尚の名を付けて拏唱されている。この和尚について
禪師は、『永平清規』「対大己五夏闍梨法」の第十五に、

五夏以上、即闍梨位、十夏已上是和尚位、切須知之。

道元禪師における「仏祖」の一考察（神戸）

即是甘露白法（五夏以上は、即ち闍梨の位、十夏已上はこれ和尚の位なり、切に須くこれを知るべし。即ちこれ甘露の白法なり）。

と、十夏以上の大己の僧を和尚とし、この和尚に対しては、第三十一に、

如遇五夏十夏之大己、当生恭敬（もし五夏十夏の大己に遇わば、当に恭敬を生ずべし）。

と、恭敬されるべき修行十年以上の高僧であり、更に、第二十五に、

大己未指揮、不得為人説法（大己未だ指揮せざるに、人の為に説法することを得ざれ）³⁾。

と、和尚ともなれば、人に説法をし、嗣法することのできる善知識であるが、「大己未だ指揮せざるに、人の為に説法することを得ざれ」である。

今では、和尚は広く僧侶の呼称として用いられているが、もともと僧とは、仏法僧の三宝における僧伽であり和合僧のことである。その中で十夏以上の僧を和尚としている。曹洞宗では、嗣法以上の僧侶分限を和尚とし、首座を置き大衆を統理し、結制安居の修行を終えた健法幢以上の

者を大和尚としている。この和尚・大和尚の法階は、禪師にとつては、正法を正伝してきた「仏祖」としての僧宝であり恭敬されるべきものであるが、曹洞宗における僧侶の位階では法階とは別に、教師としての十階級（大教正乃至三等教師）の僧階が定められている。しかし、正法を正伝し単伝してきたのは、仏祖としての和尚・大和尚である。

このことからして、禪師の仏法においては、世俗的な僧階よりも、和尚・大和尚の法階がより大切であり重要な意味を持つていることは言うまでもない。教師は、釈迦牟尼仏には大恩教主本師、高祖・太祖を始め高德の善知識には大師・禪師・猊下・老師等といった尊称とか敬称はあるものの、教師資格の僧階における階級そのものには尊称・敬称としての意味はない。仏祖を正伝すべき和尚・大和尚としての僧宝に、世俗的な僧階により階級付けをすることは、仏祖正伝の仏法には馴染みにくいものと云わねばならない。

ところで、「仏祖」の巻にある過去七仏大和尚の過去七仏は、遠い過去より永遠普遍なる真理として法を悟り法を説いてきたといわれる。その過去七仏大和尚が保持する

「法」に目覚め、仏陀となったのが釈迦牟尼仏大和尚である。そして、釈迦牟尼仏大和尚が目覚めた法である「正法」を正伝し住持して来た歴代祖師大和尚は、釈迦牟尼仏大和尚に代わって「正法」を説示して行くべき僧宝であり祖師である。しかも、仏法僧の三宝における僧宝として、正法を住持し相伝すべき役割を持つ大和尚でもある。

そこで、この過去七仏大和尚・釈迦牟尼仏大和尚・歴代祖師大和尚は、どのような大和尚であろうか。結論的にいえば、まず、過去の過去七仏大和尚は、釈迦牟尼仏の目覚めにより発見された天地自然の法としての真理、時空を究尽した永遠なる「正法」を過去七仏大和尚として顕示されたものである。そして、この顕示された過去七仏の世界は、三種の三宝の一つである「一体三宝」の世界として捉えていくことのできるものである。次に、釈迦牟尼仏大和尚については、仏陀である覚者釈迦牟尼仏大和尚と釈迦牟尼仏大和尚の説く教法と、その教法を聞く現前の仏弟子とといった和合僧からなる仏教教団の原初形態である「現前三宝」として捉えることができる。

この現前三宝における釈迦牟尼仏大和尚の説法は、過去

道元禪師における「仏祖」の一考察（神戸）

七仏大和尚の世界を離れたものではない。このことは、現前せる釈迦牟尼仏大和尚が「一体三宝」である過去七仏大和尚の世界に目覚め覚者たる仏陀であるため、仏陀の境地である自受用に浸りきっているとき、「現前三宝」は「一体三宝」の世界にある。一方、釈迦牟尼仏大和尚が、仏陀の自受用としての境地から他受用に向きを変え教法を和合僧に説く現前三宝は、ただ自受用から他受用に向きが変わっただけである。そして、この現前三宝は、釈迦牟尼仏滅後において「住持三宝」として歴代祖師大和尚の下で全機現して行くこととなる。即ち、「現前三宝」という釈迦牟尼仏大和尚の世界において、「一体三宝」と「住持三宝」とは、釈迦牟尼仏大和尚においては両翼であり両輪である。それ故、かつて釈迦牟尼仏大和尚が、「住持三宝」の第一祖である摩訶迦葉大和尚に半座を分け正法を単伝したという故実は、「現前三宝」の釈迦牟尼仏大和尚に代わって教法を説くことを意味している。このことから、現前三宝の釈迦牟尼仏大和尚は、「一体三宝」の過去七仏大和尚を踏まえて「住持三宝」の歴代祖師大和尚へと橋渡しをする要である。

このことは、「住持三宝」の歴代祖師大和尚において正法が正伝して行くには、一体三宝と住持三宝とを踏まえた「現前三宝」の釈迦牟尼仏大和尚に、身心共に立ち帰り嫡々相承して行くことである。現前三宝の釈迦牟尼仏大和尚を通して、過去仏からの正法が住持三宝の歴代祖師大和尚に正伝し現成して行くことである。このことから、この「住持三宝」における歴代祖師大和尚の役割はといえば、釈迦牟尼仏大和尚の悟った坐禪の原点に帰り、釈迦牟尼仏大和尚の悟った過去七仏の「法」を釈迦牟尼仏大和尚に代わって相伝し住持して行くことである。更に、釈迦牟尼仏大和尚が四衆に説いた教法を世間に敷衍すると共に、正法を未来永劫に嫡々相承せしめて行くことである。

以下、過去七仏大和尚の世界、釈迦牟尼仏大和尚の世界、歴代祖師大和尚の世界を一体三宝・現前三宝・住持三宝の三種に関連付けながら、禪師における「仏祖」とは何か、如何なるものであるかを窺うことにより、その一端を考察することとする。

過去七仏大和尚の世界

まず、過去七仏大和尚の世界であるが、釈迦牟尼仏大和尚と歴代祖師大和尚は、現実に存在し仏法を説く歴史上の大和尚である。しかし、過去七仏大和尚は、歴史上の大和尚と同じように実在し、釈迦牟尼仏大和尚や歴代祖師大和尚と同じように、現実に仏弟子や大衆に向かって仏法を説示しているとはいえない。いわば、過去七仏大和尚は、釈迦牟尼仏大和尚が法に目覚めることにより初めて、そのことが顕示されたものである。それ故、この法は「縁起を見る者は法を見る、法を見る者はわれ（仏陀）見る」というように、釈迦牟尼仏大和尚が十方三世に透徹した縁起の法を悟り、釈迦牟尼仏大和尚が仏陀と成ることにより過去七仏大和尚の世界も成り立ったといえる。即ち、過去七仏大和尚の世界は、悟りの世界であり、仏陀である仏そのものの世界である。仏祖でなくては窺うことのできない世界であり、意路不到・朕兆未萌已前の世界である。しかし、釈迦牟尼仏大和尚が仏陀に成ったことにより、我々に仏の世界・悟りの世界としてある「正法」を正伝し単伝している

ことを、過去七仏大和尚の相伝によつて証明しているといえる。

それでは、過去七仏大和尚という時の「過去」とは、どのような過去をいうのであろうか。「伝衣」の巻には、

過去を化し、現在を化し、未来を化するに、過去より現在に正伝し、現在より未来に正伝し、現在より過去に正伝し、過去より過去に正伝し、現在より現在に正伝し、未来より未来に正伝し、未来より過去に正伝して、唯仏与仏の正伝なり。⁽⁴⁾

とある。ここでの過去は、過去↓現在↓未来と単純に続く過去ではなく、過去・現在・未来の三世を、現在より過去に、過去より過去に、現在より現在に、未来より未来に、過去より過去に正伝する過去であるということからして、過去七仏大和尚における正法が正伝する仕方は、縦横無尽なるもの、円通自在なるものである。即ち、過去七仏大和尚の過去は十方三世の法界そのものであり、一切諸仏が充滿している世界である。それ故、過去七仏の過去の世界には、過去↓現在↓未来と続く凡夫の世界の入り込む余地はなく、諸仏のみの世界である。諸仏のみの世界は、「唯仏

与仏」と仏から仏へと正伝する世界である。いわば、過去七仏大和尚の過去は、日常的に過ぎ去つていくところの単なる過去ではなく、十方三世に透徹している廣大無辺なる法界に充滿している一切諸仏の世界が過去七仏大和尚の過去そのものに他ならない。

更に、過去について「授記」の巻には、

「過去生已滅、未來生未至、現在生無住」よらいふ。

過去かならずしも已滅にあらざ、未來必ずしも未至にあらざ、現在かならずしも無住にあらざ、無住・未至・已滅等を過現来と学すといふとも、未至のすなはち過現来なる、かならず道取すべし。⁽⁵⁾

という。維摩居士が「過去の生は已に滅しており、未來の生は未だ至らずであり、現在の生は住することが無い」といつている。しかし、過去は必ずしも已滅でもなく、未來は必ずしも未至でも無く、現在は必ずしも無住でもない。一般に、無住・未至・已滅等が、過去・現在・未來のことであるという様に学ぶけれども、未至（まだ至らない）ということが、そのまま過去・現在・未來であるという道理を必ず道取すべきとしている。このことから、過去・現

在・未來という言い方は異なつていても、過去・現在・未來は、いわば三角形の一面のようなもので、過去といえは現在・未來をも含んでいる。換言すれば、過去・現在・未來という云い方は違つていても、切り離すことのできないもの、一体なるものとして捉えられているのである。

次に、「過去七仏大和尚」の「七仏」とは如何なるものであろうか。「面授」の巻に、

七仏諸仏の過去現在未來に、いづれの仏祖か、師資相見せざるに嗣法せる⁽⁶⁾。

と。過去現在未來に自在なる七仏も、師資相見し相伝してきたという。更に、

七仏より正伝し、曹谿より正伝し、後仏に正伝す。

たゞ前後のみにあらず、釈迦牟尼仏のとき十方諸仏あり⁽⁷⁾。

とあるように、過去七仏は七仏に限らず曹谿より七仏へ、曹谿より後の仏祖へと正伝するのであるが、「釈迦牟尼仏のとき十方諸仏あり」であるため、「いづれの仏祖か」である。それでは、何故七仏かと言えば、釈迦牟尼仏大和尚にとっては、過去七仏は過去現在未來の十方三世に充満し

ている一切諸仏のことであるが、正法を正伝するとなると、七仏のように師資相伝することになるからである。

法界に充満し偏在している法は、釈迦牟尼仏大和尚にとつては十方三世の一切諸仏であり、仏祖として保持され正伝されていくものである。そして、この一切諸仏として保持されている仏祖の正法が、現実に顕示されるには過去七仏大和尚として仏祖より仏祖へ、師資相伝していくことを示している。そして、その師資相伝が過去七仏大和尚に限らず遠い過去から断絶することなく釈迦牟尼仏大和尚に至っていることを、具象的に過去七仏大和尚として示したものである。また、法界に充満している法が、一切諸仏の正法として歴代祖師大和尚に正伝されるには、過去七仏大和尚から釈迦牟尼仏大和尚に正伝されてきたのと同じく、遠い過去から断絶することなく師資相伝において伝えられねばならないことを示している。即ち、過去七仏大和尚の世界は、正法が十方三世の法界に充満していることと、その正法を保持するところの諸仏は、大和尚から大和尚へと師資相伝において正伝していることを示すものである。

そこで、限りなき過去七仏大和尚から正法を保持してい

る諸仏に大和尚として相見するには、どうすればよいか。

雲雷音宿王華智仏、告妙莊嚴王言、「大王当知、善知識者、是大因縁。所謂化導、令得見仏、発阿耨多羅三藐三菩提心」(雲雷音宿王華智仏、妙莊嚴王に告げて言く、「大王当に知るべし、善知識は是れ大因縁なり。所謂化導は、仏を見て、阿耨多羅三藐三菩提心を発すことを得しむ」)。

いまこの大会は、いまだむしろをまかず。過去・現在・未来の諸仏と称すといへども、凡夫の三世に准的すべからず。いはゆる過去は心頭なり、現在は拳頭なり、未来は脳後なり。しかあれば、雲雷音宿王華智仏は、心頭現成の見仏なり。見仏の通語いまのごとし。「化導」は見仏なり、「見仏」は「発阿耨多羅三藐三菩提心」なり。発菩提心は見仏の頭正尾正なり。

禪師は、『妙法蓮華経妙莊嚴王本事品』の文を引用して、この經典に説かれている過去仏大和尚から釈迦牟尼仏大和尚までの法華の大法会は未だ終わっていない。ここにいう、過去・現在・未来の三世の諸仏は、我々凡夫における過去現在未来という基準に当てはまらない。いわゆる、

道元禪師における「仏祖」の一考察(神戸)

過去は心の中に、現在はこの現実の拳頭のところに、未来は頭の後のところにある。即ち、過去現在未来は、この我々自身の心にあつて、切り離されているものではない。それ故、過去仏である雲雷音宿王華智仏は、単なる過去仏ではなく、心頭として心の中に現成しているから、仏に見えることができるのである。この過去仏に見えることが、過去・現在・未来の三世諸仏を究尽している仏に見えることとなる。そのため、三世を究尽し透徹している過去仏大和尚に化導されることは、三世に通達している仏に見えることであり、阿耨多羅三藐三菩提心を発すことであるという。したがって、菩提心を発すことが、仏に見えることの初めであり終わりであり全てということになる。

このように、菩提心を発すことが形なき過去仏大和尚を中心の中に現成することとなり、三世に通達した仏に見えることとなる。即ち「見仏」である。これは、過去仏の「化導」によるものであるが、過去仏の「化導」を受けるためには、阿耨多羅三藐三菩提心を発すこと、「発菩提心」が大事であるということになる。換言すれば、法界に充満している十方三世の一切諸仏の過去仏は、「発菩提心」する

ことにより、過去仏に化導されることとなり、仏に見えることとなる。

更に、

過去・現在・未来の諸仏の行持によりて、過去・現在・未来の諸仏は現成するなり。その行持の功德、ときにかくれず、かるがゆゑに発心修行す。その功德、ときにあらわれず、かるがゆゑに見聞覺知せず。あらわれざれども、かくれずと参学すべし。隠顕存没に染汚せられざるがゆゑに¹⁰。

というように、「発菩提心」により仏に見えるには、過去・現在・未来の諸仏の行持により現成するという。その行持の功德は、ときに現れて発心修行することとなる。それ故、この発心という「発菩提心」は、諸仏の行持からの「菩提心発」ということになり、やがて、発心・修行・菩提・涅槃と行持道環する諸仏の行持となる。また、諸仏の行持なるが故に、ときには現れずに諸仏を見聞することも覚知することもない。しかし、現れなくても、諸仏から発する行持の功德は隠れずと参学すべきだという。その訳はいえ、行持の功德は、隠れたり顕れたり存在したり没却

することには関係ないからである。それは、諸仏の行持というのは「染汚せられざる」不染汚の行持そのものだからである¹¹。

ところで、過去・現在・未来の法界に充滿する過去七仏大和尚として示されている諸仏は、釈迦族のゴータマ・シツダルタが菩提樹下で、世界人生の真実のあり方である縁起の法に目覚め、釈迦牟尼仏（覚者）と成ることにより、初めて縁起の法が十方三世の一切諸仏として説示されることとなったことは、既に述べた通りである。このことにより、過去仏の世界は、釈迦牟尼仏大和尚を基点として過去七仏大和尚の世界へと示されているのである。即ち、十方三世の一切諸仏としてある法の世界は、ゴータマ・シツダルタをして釈迦牟尼仏大和尚たらしめた。一方において、ゴータマ・シツダルタは、法の世界を悟り諸仏の世界に目覚めて仏陀と成った。そのことにより、世界人生の真実のあり方である十方三世の一切諸仏の世界である正法が顕示されることとなったのである。それ故、覚者としての釈迦牟尼仏大和尚は、法の世界である一切諸仏を本質としており、法としての諸仏と一体であり法と不離である。

このように、本来「法」と一体である過去七仏大和尚の世界が、法に目覚めた釈迦牟尼仏大和尚とつての世界でもある。換言すれば、釈迦牟尼仏大和尚の悟りの世界、仏の世界は、釈迦牟尼仏大和尚を中心に、道環的・円筒的に広大無辺なる十方三世の法界に余すことなく広がり、一切諸仏が充滿する過去七仏大和尚の世界をなしているのである。釈迦牟尼仏大和尚が三世に透徹している過去七仏大和尚と成ることによって、過去七仏大和尚から釈迦牟尼仏大和尚に、唯仏与仏として正法が正伝されることとなる。また、過去七仏大和尚は、今も十方三世の一切の諸仏として法界に充滿し化導し続けている大和尚としてある。この意味で、過去七仏大和尚は、法界において、正法を常に保持し正法を常に顕示すると共に、正法を常に尽未来際に正伝している大和尚である。そこでの仏法僧の在り方は、「一体三宝」として示されるものである。

この「一体三宝」について、「帰依仏法僧」の巻には、
一体三宝

証理大覚、名爲仏宝。

清淨離染、名爲法宝。

道元禪師における「仏祖」の一考察（神戸）

至理和合、無擁無滯、名爲僧宝。¹³⁾

と、一体三宝の様子について述べている。即ち、悟りそのものにある大覚者を仏宝と名づけ、汚れを離れた悟りの清浄性を法宝と名づけ、悟りを擁ぐこと無く悟りに滞ることも無い、理想的な和合のあり方を僧宝と名づけるとしている。いわば、過去七仏大和尚の世界は、清浄で滞ることのない悟りそのものにある大覚者仏陀の世界であり、一体三宝として仏法僧が未分の状態にあるあり方のことである。

このことは、一体三宝としてある過去七仏大和尚は、菩提樹下で悟りに浸っている釈迦牟尼仏の境涯であり、自受用三昧の境界にあることを示している。即ち、釈迦牟尼仏大和尚の坐禅において、仏と法と僧の三宝が分かれる以前の悟りそのものの状態を意味している。その未分の状態を、『辨道話』では、

諸仏如来、ともに妙法を単伝して、阿耨菩提を証するに、最上無為の妙術あり。これたゞ、ほとけ仏にさづけてよこしまなることなきは、すなはち自受用三昧、その標準なり。¹⁴⁾

と述べている。諸仏如来がともに妙法を単伝している自受

用三昧の世界が、過去七仏大和尚そのものの世界であり、一体三宝として在るべき標準である¹⁴。この自受用三昧において、釈迦牟尼仏大和尚が過去七仏大和尚から受用する妙法は、「ほとけ仏にさづけて」というように「唯仏与仏」において単伝する世界である。この「唯仏与仏」の世界は、一体三宝となつて十方三世に到達しており、法界に一切諸仏を充滿せしめているのである。しかし、ここでの単伝は、過去から未来へと単純に単伝するのではなく、過去・現在・未来の三世を、先に引用した「伝衣」の巻によれば、現在より過去に、過去より過去に、現在より現在に、未来より未来に、未来より過去にというように縦横無尽に単伝するのが、自受用三昧の世界である。

このような世界にある釈迦牟尼仏大和尚は、一体三宝としてある釈迦牟尼仏大和尚である。しかも、自受用三昧にあつて、妙法を過去から受用し正伝していることを、単なる正伝でなく真理として顯示し住持せしめている。それが釈迦牟尼仏大和尚であり、過去七仏大和尚であり、西天二十八祖であり、東土二十二祖という諸仏祖であり、歴代祖師である。

そこで、自受用三昧における過去七仏大和尚に代表される、一体三宝としての過去七仏大和尚は、

諸仏のつねにこのなかに住持たる、各々の方面に知覚をのこさず。群生のとこしなへにこのなかに使用する、各々の知覚に方面にあらはれず¹⁵。

と、過去・現在・未来の十方三世の一切諸仏は、いつでもこの自受用三昧にあつて法を保持しているが、どの方面にも知覚のあとを残さない。衆生も永久にこの自受用三昧の中で知覚活動をしているのであるが、その知覚がどの方面から現れるのかわからない。即ち、自受用三昧の世界は、仏法僧そのものの働きや方面があつても、一体三宝なるがために、あとを残さないのである。

それでは、自受用三昧とは、どのようなものかといえ

ば、心境ともに静中の証入・悟出あれども、自受用の境界なるをもて、一塵をうごかさず、一相をやぶらず、大の仏事、甚深微妙の仏化をなす。この化道のおよぶところの草木土地、ともに大光明をはなち、深妙法をとくこと、きわまるときなし¹⁶。

と。自受用三昧のなかで、証入・悟出があっても、法の保持者であり、十方三世に透徹した過去七仏大和尚が自受用する境界であるから、一塵も動かさず、一相にも取捨選択に陥ることなく、広大なる仏の活動をし、甚深微妙な教法を説いているのである。仏の化導のおよぶところ、草木土地がそのままに、それぞれにみな大光明を放って、深妙なる教法を説いて窮まる時がないというのである。

このように、自受用三昧の中で、一体三宝としてある過去仏大和尚の世界では、無情なる草木土地も青色青光・黄色青光と大光明をはなち、諸仏の教法を説き正法を正伝しているとする。その消息を「無情説法」の巻に、

しかあればすなはち、諸仏の説法を使用するがごとく、諸仏は説法を使用するなり。諸仏の説法を正伝するがごとく、諸仏は説法を正伝するによりて、古仏より七仏に正伝し、七仏よりいまに正伝して無情説法あり。この無情説法に諸仏あり、諸祖あるなり。¹⁷⁾

と述べている。古仏より正伝している過去七仏大和尚・十方三世の一切諸仏の世界では、草木土地の無情が大光明をはなち教法を説いており、説いているところに諸仏諸祖が

道元禪師における「仏祖」の一考察（神戸）

存在しているとする。無情なる草木土地が説法を正伝するように、過去七仏大和尚に代表される十方三世の一切諸仏も説法を正伝しており、現在も正伝されて教法を説き続けている。このことは、宋代の東坡居士蘇軾（一〇三六—二〇一）が、廬山に行った折りに、溪水の流れる音を聞き悟道した。その時の偈が「溪声山水」の巻にあるので示せば、

溪声更是広長舌、（溪声更ち是れ広長舌）

山色無非清浄身。（山色清浄身に非ざることを無し）

夜来八万四千偈、（夜来八万四千偈）

他日如何拳似人。（他日如何が人に拳似せん）¹⁸⁾

とある。禪師は、

しかあれば、聞溪悟道の因縁、さらにこれ晚流の潤益なからんや。あはれむべし、いくめぐりか現身説法の化儀にもれたるがごとくなる。なにとしてかさらに山色をみ、溪声をきく。一句なりとやせん、半句なりとやせん、八万四千偈なりとやせん。うらむべし、山水にかくれたる声色あること。又よるこぶべし、山水にあらはるゝ時節因縁あること。舌相も懈倦なし、身色

道元禪師における「仏祖」の一考察（神戸）

あに存没あらんや。⁽¹⁹⁾

と語っている。東坡居士の聞溪悟道の因縁は、後輩にどうして益ないといえようか。あわれむべきは、何回か現身說法の化儀に漏れたことである。それがなんとしてか、今また山色を見、溪声を聞くとは。これは、仏の一句か、半句か、八万四千偈であるうか。うらむべきは、山水の說法に気づかない声や姿があることである。また、喜ぶべきは、山水に現れた說法の時節因縁あることをとっている。気づかなくとも、仏の說法はいつもされていくし、姿が存没することがあろうかといひ、仏の声や姿が何時も現成し說法していることを述べている。このことを禪師は『傘松道詠』に示して、

峰の色溪の響きもみななから我釈迦牟尼の声と姿と。⁽²⁰⁾

と、その消息を述べている。

釈迦牟尼仏大和尚の世界

それでは、歴史上に存在し、法を悟り仏陀となった釈迦牟尼仏大和尚の世界は、どのようなものであろうか。一即心是仏」の巻に、

いはゆる諸仏とは釈迦牟尼仏なり。釈迦牟尼仏これ即心是仏なり。過去・現在・未來の諸仏、ともにほとけとなるときは、かならず釈迦牟尼仏となるなり。これ即心是仏なり。⁽²¹⁾

と述べている。諸仏とは釈迦牟尼仏である。釈迦牟尼仏、これが即心是仏であるという。また、過去・現在・未來の十方三世の一切諸仏がみな仏となるときは、必ず即心是仏としての釈迦牟尼仏であるといっている。このことによつて、十方三世の一切諸仏は即心是仏にある釈迦牟尼仏を原点としていること、換言すれば、過去七仏大和尚も未來の歴代大和尚も、全ての十方三世の一切諸仏は、悉く即心是仏としてある釈迦牟尼仏大和尚の世界に落ち着くのである。このことは、『道元禪師広縁』に、

今我本師釈迦牟尼大和尚、般涅槃于鳩尸那城跋提河沙羅林。何啻釈迦牟尼仏而已哉。過去未來現在十方一切諸仏、悉皆向今日半夜而般涅槃。非唯諸仏、西天二十八祖・唐土六祖、有巴鼻有頂顛、悉皆向今日半夜般涅槃矣。無前無後、無自無他矣。未向今日半夜而般涅槃、非其仏祖矣、非其作家矣。（今、我が本師釈迦牟

尼大和尚、鳩戸那城跋提河の沙羅林に般涅槃したまう。何ぞただ釈迦牟尼仏のみならんや。過去未來現在十方一切の諸仏、悉くみな今日の半夜に般涅槃す。ただ諸仏のみにあらず、西天二十八祖・唐土六祖、巴鼻あり、頂顛あるは、悉くみな今日の半夜に般涅槃す。前なく後なく、自なく他なし。未だ今日の半夜に般涅槃せざるは、それ仏祖にあらず、それ作家にあらず⁽²²⁾。

とあるように、我が本師釈迦牟尼仏大和尚が滅する時、十方三世の一切諸仏・十方三世の過去七仏大和尚も悉くみな般涅槃すという。釈迦牟尼仏大和尚と同生同滅していることが述べられている。更に、西天二十八祖・唐土六祖といった歴代祖師も、同じく般涅槃すという。「仏となるときは、必ず釈迦牟尼仏は即心是仏である」世界にあつては、一体三宝の過去七仏大和尚も、住持三宝の歴代祖師大和尚も、即心是仏としてある釈迦牟尼仏大和尚の世界にあることを示すものである。即ち、現前三宝の釈迦牟尼仏大和尚が即心是仏である時は、「一体三宝」にある十方三世の過去七仏大和尚・十方一切の諸仏と「住持三宝」にある

道元禪師における「仏祖」の一考察（神戸）

歴代祖師も、釈迦牟尼仏大和尚における即心是仏の世界を離れていないことが知られる。

このように、「一体三宝」と「住持三宝」とを内容として踏まえている即心是仏における釈迦牟尼仏大和尚の世界は、どのようなものであろうか。「洗淨」の巻に、

いま大師釈迦牟尼仏の仏法、あまねく十方につたはれるといふは、仏身心の現成なり、仏身心現成の正当愆麼時、かくのごとし⁽²³⁾。

とある。大師釈迦牟尼仏の仏法が普く十方に伝わっていることが、仏の身心そのものの現成である。また、仏の身心の現成は、まさに大師釈迦牟尼仏の仏法が、普く十方に伝わっていることであるとしている。そして、その伝わり方は、

七仏より正伝し、曹谿より正伝し、後仏に正伝す。ただ前後のみにあらず。釈迦牟尼仏のとき十方諸仏あり⁽²⁴⁾。

と。仏法は、七仏から慧能に正伝し、逆に慧能から七仏へ正伝し、慧能から後の仏祖に正伝するのであるが、この正伝の仏法は時間的な前後だけでなく、即心是仏にある釈迦

牟尼仏大和尚の仏法は、すでに時空を超えて十方三世の一切諸仏に正伝しているという。七仏より釈迦牟尼仏大和尚へ正伝した仏法は、同時に六祖慧能といった歴代の祖師にも正伝しているというのである。

いわば、覺者と成った釈迦牟尼仏大和尚の世界は、過去七仏大和尚である一切諸仏の側に軸足を踏まえた「一体三宝」と、歴代祖師の曹谿側に軸足を踏まえた「住持三宝」とを両般として成り立っている即心是仏の世界である。即ち、「現前三宝」の釈迦牟尼仏大和尚の世界は、過去七仏大和尚の世界と歴代祖師大和尚の世界とを内蔵している世界であるといえる。更に、

いはゆる世界は、十方みな仏世界なり。非仏世界いま
だあらざるなり。⁽²⁵⁾

と、いつていることから、覺者釈迦牟尼仏の出現が、一体三宝といった過去七仏大和尚を現前化させ、法界の眞実なる仏の教法を説く現前三宝における本師釈迦牟尼仏大和尚を出現せしめたのである。このことにより、住持三宝の歴代祖師大和尚により、釈迦牟尼仏大和尚の説く正伝の仏法が未来に向けて現実的に相承されて行くこととなったので

ある。逆にいえば、「一体三宝」の過去七仏大和尚も、「住持三宝」の歴代祖師大和尚も、正法を正伝して行くには、「釈迦牟尼仏これ即心是仏なり」の釈迦牟尼仏と成ることによって、正法を正伝し、釈迦牟尼仏大和尚に代わって正法が説かれて行くこととなるのである。

それでは、現前三宝としての釈迦牟尼仏大和尚とは如何なる仏であろうか。一般に、現前三宝の仏は釈迦牟尼仏大和尚自身が仏宝の仏であり、仏の説示された教法が法宝としての法であり、釈迦牟尼仏大和尚の弟子達の出家教団が僧宝としての僧であるといわれている。そこで、釈迦牟尼仏大和尚が、教法を僧に説示するということは、如何なることであろうか。「辨道話」に、

大師釈尊、靈山会上にして法を迦葉につけ、祖々正伝
して菩提達磨尊者にいたる。尊者、みづから神丹国に
おもむき、法を慧可大師につけき。これ東地の仏法伝
來のはじめなり。⁽²⁶⁾

とある。釈迦牟尼仏大和尚の正伝の仏法は、靈山会上の拈華微笑により迦葉に附授され、祖々正伝して菩提達磨へ。菩提達磨自ら中国へやって来て慧可大師へ附授した。これ

が中国伝来のはじめであると述べている。

ここに、釈迦牟尼仏大和尚の正伝の仏法を説示することは、拈華微笑に象徴されているように、正法の説示以外に、人から人へ全人格から全人格へと歴代祖師に嫡々相承されていることでもある。更に、

わが大師釈迦牟尼如来、正法眼蔵無上菩提を摩訶迦葉に附授するに、仏衣ともに伝授せりしより、嫡々相承して曹谿山大鑑禪師にいたるに三十三代なり。その体・色・量を親見親伝せること、家門ひさしくつたはれて、受持いまにあらたなり。すなはち五宗の高祖、
おのおの受持せる、それ正伝なり。

といい、

おのおの師資みだることなく、先仏の法によりて搭し、先仏の法によりて製することも、唯仏与仏の相伝し証契して、代々をふるに、おなじくあらたなり。²⁷⁾

といつている。拈華微笑により摩訶迦葉に正法を附授したとき、「法によりて搭し」「法によりて製する」仏衣も共に相伝された。この仏衣である袈裟を受持して伝えることも、「唯仏与仏」の相伝であり証契であるという。

道元禪師における「仏祖」の一考察（神戸）

このように、大師釈迦牟尼仏の正伝の仏法が師から資へ乱れることなく単伝するには、教法の説示や拈華微笑の「以心伝心」によるだけでなく、仏衣である袈裟で身をもつた姿や形をも受持して行くことである。このことからして、正法を正伝することは、釈迦牟尼仏の心と共に袈裟をかけた外形をも全て受持し相伝することである。そこに、仏祖が嫡々相承してきた正伝の仏法があり、嫡々相承されるべき師資の嗣法がある。このことを、

「初祖摩訶迦葉、悟於釈迦牟尼仏。釈迦牟尼仏、悟於迦葉仏」。

かくのごとくかきたり。

道元これをみしに、正嫡の正嫡に嗣法あることを決定信受す。未曾見の法なり。仏祖の冥感して児孫を護持する時節なり。感激不勝なり。²⁸⁾

と。禪師は嗣書を拝覧したときに、初祖の摩訶迦葉は釈迦牟尼仏により悟り、釈迦牟尼仏は迦葉仏によつて悟るとあった。これにより、正法が正伝していくのは正嫡が正嫡に、一滴も漏らさず、内外共に全人格をもって嗣法していくものであることを確信し、感激不勝と述べている。ま

道元禪師における「仏祖」の一考察（神戸）

た、先師天童大和尚のお示しとして、

先師古仏天童堂上大和尚、しめしていはく、「諸仏かならず嗣法あり、いはゆる釈迦牟尼仏者、迦葉仏に嗣法す、迦葉仏者、拘那含牟尼仏に嗣法す、拘那含牟尼仏者、拘留孫仏に嗣法するなり。かくのごとく仏仏相嗣して、いまにいたると信受すべし。これ学仏の道なり」⁽²⁹⁾。

と述べ、摩訶迦葉が釈迦牟尼仏に嗣法したのと同じく、釈迦牟尼仏も迦葉仏に嗣法したのである。このことは、過去七仏も三世諸仏も、仏々相嗣してきたことを意味している。そして、そのことが今に至っていると信受すべきであるという。この仏々相嗣が、学仏の道であるように、釈迦牟尼仏大和尚が、仏々相嗣し説示してきた正法は、弟子の僧達も同じように祖々相嗣すべきことを教示している。そこに、現前三宝の釈迦牟尼仏大和尚が弟子に正法を説き、仏々に相嗣し祖祖に相嗣してきた意義もある。

このように、現前三宝における釈迦牟尼仏は、一体三宝の方面に迦葉仏大和尚といった過去七仏・十方三世の一切諸仏を、また住持三宝の方面に摩訶迦葉大和尚といった歴

代祖師の諸祖師を両般とし、釈迦牟尼仏大和尚を主軸にして現前三宝の世界を十方三世に向けて、円筒的に展開しているといえよう。

それでは、住持三宝である歴代祖師大和尚の方面は、如何なる世界であろうか。以下、考察していくこととする。

歴代祖師大和尚の世界

釈迦牟尼仏大和尚入滅後の各時代における住持三宝の歴代祖師は、釈迦牟尼仏大和尚の心と仏衣と共に身心の全人格を相嗣し住持している方袍円頂の歴代祖師大和尚である。これらの祖師について禪師は、どのように述べているであろうか。「仏道」の巻には、

曹谿古仏、あるとき衆にしめしていはく、「慧能より七仏にいたるまで四十祖あり」。

この道を参究するに、七仏より慧能にいたるまで四十仏なり。仏々祖々を算数するには、かくのごとく算数するなり。かくのごとく算数すれば、七仏は七祖なり、三十三祖は三十三仏なり。曹谿の宗旨かくのごと

し、これ正嫡の仏訓なり。正伝の嫡嗣のみ、その算数の法を正伝す。³⁰⁾

と記すように、過去七仏から歴代祖師を見れば、祖師も仏である。逆に歴代祖師から過去七仏を見れば、七仏も祖師である。このように仏々祖々を数える場合、七仏から数える場合は全て仏であり、歴代祖師から数える場合は全て祖である。即ち、七仏は七祖であり、歴代祖師は歴代仏であるということになる。このことは、仏は祖であり、祖は仏である。仏といい祖というのも、仏々といい祖々というのも同じ意味である。大和尚である仏と大和尚である祖師は、不離一体なる仏祖である。このような不離一体なる仏祖の在り方は、正伝の嫡嗣のみが正しく伝えていているという。そこでまず、釈迦牟尼仏大和尚から正伝し、歴代の初祖となった摩訶迦葉大和尚は、どのようにして正嫡の仏祖となったのであろうか。

釈尊の正法眼蔵無上菩提は、たゞ摩訶迦葉に正伝せしなり。余子に正伝せず、正伝必ず摩訶迦葉なり。このゆゑに、古今に仏法の真実を学する箇々、ともにみな従来の教学を決択するには、かならず仏祖に参究する

道元禪師における「仏祖」の一考察（神戸）

なり。決を余輩にとぶらはず。もし仏祖の正決をえざるは、いまだ正決にあらず。依教の正不を決せんとおもはんは、仏祖に決すべきなり。そのゆゑは、尽法輪の本主は仏祖なるがゆゑに。道有道無、道空道色（有と道ひ無と道ひ、空と道ひ色と道ふ）、たゞ仏祖のみこれをあきらめ、正伝しきたりて、古仏今仏なり。³¹⁾

と述べている。釈迦牟尼仏大和尚の正法眼蔵無上菩提は、摩訶迦葉大和尚に正伝されたのであるが、正伝の仕方は拈華微笑に象徴されるように、古今にわたって仏法の真実を学するために、必ず仏祖が仏祖に参究していたからである。仏祖以外の人に教学の決択を得ることは、正しい決択とはならない。依るべき教法の正しいか否かを決択しようと思うならば、仏祖そのものに依らなければならぬ。その理由は、尽法輪の根源的主体は仏祖だからである。有と無い無といい、空といい色という、その真実は仏祖のみが正伝してきている。それ故、古仏から今仏へ、古仏となり今仏となるのであるという。言い換えれば、今祖から古祖へ、今祖となり古祖となることができる。このことは、摩訶迦葉大和尚へ仏法が正伝するには、仏祖である釈

道元禪師における「仏祖」の一考察（神戸）

迦牟尼仏大和尚に、同じく仏祖である摩訶迦葉大和尚が参究することである。仏祖から仏祖への参究によって正伝するのである。

このように、住持三宝の初祖摩訶迦葉大和尚が歴代祖師の「仏祖」となり、次へ法輪を転じ正法を正伝する。そのために、歴代祖師は「仏祖」としての歴代祖師大和尚でなければならぬ。そこに、仏祖正伝の仏法が住持三宝において行持されているといえよう。

それでは、歴代祖師の住持三宝において、仏祖であり仏祖となるためには、どのような道があるであろうか。禪師は、

大師釈尊、まさしく得道の妙術を正伝し、又三世の如来、ともに坐禅より得道せり。このゆゑに正門なることをあひつたへたるなり。しかのみにあらず、西天東地の諸祖、みな坐禅より得道せるなり。ゆゑにいま正門を人天にしめす。⁽³²⁾

と、大師釈尊が得道の妙術として正伝した坐禅は、三世の如来も西天東地の諸祖も、みなこの坐禅により得道して祖師と成ったとして坐禅の道を示している。また、

坐禅辦道して仏祖の大道を会通す。

とあり、

坐禅辦道して、仏祖の大道に証入す。⁽³³⁾

として、仏祖の道に会通し証入するために坐禅辦道すべきことが述べられている。更に、仏祖の坐禅辦道であるために、

坐禅辦道して、諸仏自受用三昧を証得すべし。⁽³⁴⁾

というように、諸仏の自受用三昧を証得すべき坐禅辦道をするべきであると述べている。そのため、

お帆よそ仏祖の児孫、かならず坐禅を一大事なりと参学すべし、これ単伝の正印なり。⁽³⁵⁾

という。更に、仏法の伝わるのは坐仏の伝わることであるとして、

おほよそ西天東地に仏法つたはるゝといふは、かならず坐仏のつたはるゝなり。それ要機なるによりてなり。仏法つたはれざるには坐禅つたはれず、嫡々相承せるはこの坐禅の宗旨のみなり。この宗旨いまだ単伝せざるは仏祖にあらざるなり。この一法あきらめざれば万法あきらめざるなり、万行あきらめざるなり。

法々あきらめざらんは明眼といふべからず、得道にあらず。いかでか仏祖の今古ならん。こゝをもて、仏祖かならず坐禪を単伝すると一定すべし。⁽³⁶⁾

と、インドや中国に仏法が伝わるというのは、かならず坐仏が伝わるということである。坐仏こそ仏法の伝わる肝心要であるとする。仏法が伝わらないところには、坐禪も伝わらない。仏祖より仏祖に嫡々相承してきたのは、この坐禪の宗旨のみである。この坐禪の宗旨を未だ単伝しなければ、仏祖ではない。この一法を明らかにしなければ、万法も明らかにならないし、万行も分らない。万法も万行も明らかにならなければ、明眼の人とはいえないし、得道の人でもない。どうして古今を通じての仏祖といえようかという。これによって仏祖は必ず坐禪を宗旨とすべきであるとして、嫡々相承する仏祖正伝の仏法は、坐仏としての坐禪により伝わるとしている。

しかし、「坐禪の宗旨のみ」というのは、禪宗のみという名称を意味することではない。このことを禪師は、しかあるを、仏々正伝の大道を、ことさらに禪宗と称するともがら、仏道は未夢見在、未夢聞在なり、未夢伝

道元禪師における「仏祖」の一考察（神戸）

在なり。禪宗を自号するともがらにも仏法あるらんと聽許することなかれ。禪宗の称、たれか称じきたる。諸仏祖の禪宗と称する、いまだあらず。⁽³⁷⁾

と、仏々（仏祖）正伝する坐禪の大道を、禪宗と称する者は、未だ夢にも仏道を見ることも、聞くことも、伝持することもない。禪宗と自称する者にも仏法はあるのでは、と心を許してはならない。禪宗の名称を称した諸仏祖は、未だかつていないとして、称するのは、魔党であり仏祖の自孫ではないと述べている。

更に、釈迦牟尼仏大和尚が摩訶迦葉大和尚に附嘱したのは、正法眼蔵涅槃妙心であつて禪宗を附嘱したのではない。また、仏衣を授けるといったのも、禪宗を授けるといったのではないとして、

世尊の迦葉大士に附嘱します、一吾有正法眼蔵涅槃妙心」なり。このほかさらに吾有禪宗附嘱摩訶迦葉にあらず。

「并府僧伽梨衣」といひて并府禪宗といはず。しかあればすなはち、世尊在世に禪宗の称またくきこえず。⁽³⁸⁾と、世尊在世においても禪宗の名称は、まったく聞こえな

道元禪師における「仏祖」の一考察（神戸）

かったという。このことは、

五祖・六祖の会に禪宗の称きこえず。青原・南嶽の会に禪宗の称きこえず。⁽³⁹⁾

と、歴代祖師においてもなかったと述べている。更に、禪宗という名称を後学の者がみだりに称すれば、仏祖を損なうものである。もし、仏祖の道のほかに禪宗という法があるならば、外道の法であるともいつている。このように、摩訶迦葉大和尚に正伝された仏法には、初めから禪宗という名称は無かったことが示されている。

更に、坐禅して仏祖であり仏祖となるための「場」には、徹頭徹尾、仏祖であるところの安居があることが示されている。

安居の頭尾、これ仏祖なり。このほかさらに寸土なし、大地なし。夏安居の一概、これ新にあらざ旧にあらず、来にあらざ去にあらざ。その量は拳頭量なり、その様は巴鼻量なり。しかあれども、結夏のゆゑにきたる、虚空塞破せり、あまれる十方あらず。解夏のゆゑにきたる、通地を裂破す、のこれる寸土あらず。このゆゑに結夏の公案現成する、きたるに相似なり。解夏

の籬籠打破する、さらに相似なり。かくのごとくなれども、親曾の面々ともに結解を罣礙するのみなり。万里無寸草なり、還吾九十日飯錢来（吾れに九十日の飯錢を還し来れ）なり。⁽⁴⁰⁾

安居に会うことは、仏祖に会うことだという。安居が結ばれると安居が来たると思ひ、安居が解かれると安居が去ると思うが、「来にあらざ、去にあらざ」である。また、安居に親しんできた面々には、安居の結解を罣礙するだけのことであるという。しかも、

安居の道場、これ仏祖の心印なり、諸仏の住世なり⁽⁴¹⁾とある。このことにより、俗世の現実にある住持三宝の僧宝にとつては、「安居の頭尾、これ仏祖なり」と、安居の世界は仏祖の心印であり、仏祖の住する世界である。当に安居は、仏祖から仏祖に、仏祖の正法が正伝する世界であるといえる。

更に、

仏祖の児孫なるもの安居せざるはなし、安居せんは仏祖の児孫とするべし。安居するは仏祖の身心なり、仏祖の眼睛なり、仏祖の命根なり。安居せざらんは仏祖

の児孫にあらず、仏祖にあらざるなり。いま泥木・七宝の仏菩薩、みなともに安居三月の夏坐おこなはるべし。これすなはち住持仏法僧宝の故実なり、仏訓なり。おほよそ仏祖の屋裏人、さだめて坐夏安居三月、つとむべし。⁽⁴²⁾

と、禪師にとって安居は、仏祖の身心であり、仏祖の眼睛であり、仏祖の命根である。即ち、仏祖そのものであり、仏祖の児孫であると知るべきであるという。そして、泥木・七宝の仏菩薩も安居を行うという。これが、住持仏法僧の三宝としての故実であり、仏の訓えである。それ故、仏祖から仏祖へ仏祖を相伝すべき僧宝は、九旬安居に努めるべきであるとしている。このことから、安居ということが、住持三宝における僧宝にとって如何に重要なものであるかが分かる。また、先に引用した『永平清規』「対大己五夏闍梨法」において「十夏已上はこれ和尚の位なり」とあった。このことからしても、住持三宝にある僧宝が「唯仏与仏」と正伝する仏祖としての和尚・大和尚の位に入るために、如何に安居が必要なものあり、重要なものであるかが窺える。

道元禪師における「仏祖」の一考察（神戸）

ところで、住持三宝の僧宝は、正法を正伝する仏祖の大道に証入するために、坐禪辦道することであった。そこで、この坐禪において何が伝えられたのか。また、それ以外に何が伝えられているのであろうかというに、まず、釈迦牟尼仏大和尚から摩訶迦葉大和尚に伝えられたのは、内容的には「正法眼蔵涅槃妙心」である。外形的には、「法によりて搭し」・「法によりて製する」仏衣である袈裟を着け坐禪を修する坐仏としての形である。

過去七仏大和尚から釈迦牟尼仏大和尚へ正伝された正法を相伝するには、住持三宝の歴代祖師大和尚は、袈裟を着け坐禪をすることである。即ち、釈迦牟尼仏大和尚に内容的にも外形的にも、身心共に立ち帰り行持することである。そのことにより、住持三宝の僧宝は歴代祖師大和尚たり得るといえる。それには、住持三宝においては、内容的にも外形的にも日常低として釈迦牟尼仏大和尚と成る行持の場所である「安居」において、袈裟を着け坐禪を基本にした仏祖の行持が伝えられて行くことである。

この仏衣である袈裟の色について、禪師は「袈裟功德」の巻で、

道元禪師における「仏祖」の一考察（神戸）

おほよそ袈裟、そめて青黄赤黒紫色ならしむべし。いづれも色のなかの懐色ならしむ。如来はつねに肉色の袈裟を御しましませり、これ袈裟色なり。初祖相伝の仏袈裟は青黒色なり、西天の屈胸布なり、いま曹谿山にあり。西天二十八伝し、震旦五伝せり。いま曹谿古仏の遺弟、みな仏衣の故実を伝持せり、余僧のおよぼざるところなり。⁽⁴³⁾

と述べている。袈裟は、青・黄・赤・黒・紫色にならしめるがよい。何れも原色ではなく、壊色にする。如来はつねに肉色の袈裟を着けておられた。これが袈裟の色である。達磨大師相伝の仏衣である袈裟は、青黒色であり、インドの屈胸布で、いま曹谿山にある。インドで二十八伝し、中国で五伝してきたのである。曹谿山の古仏慧能の遺弟は、みな仏衣の慣習を伝持してきており、他宗の及ぶものではないとして、仏衣である袈裟が達磨大師に、六祖慧能に伝わって来たことを述べている。このように、住持三宝において、僧宝の仏衣である袈裟は、仏祖の正法が正伝して行くためにはなくてはならないものである。そして、この袈裟について、

商那和修尊者は第三の附法蔵なり、むまるゝときより衣と俱生せり。この衣、すなはち在家のときは俗服なり、出家すれば袈裟となる。また鮮白比丘尼、発願施氈ののち、生々のところ、および中有、かならず衣と俱生せり。今日釈迦牟尼仏あふたてまつりて出家するとき、生得の俗衣、すみやか転じて袈裟となる。和修尊者におなじ。⁽⁴⁴⁾

と。和修尊者は、附法蔵第三祖の仏祖で、衣を着けてうまれた。この衣は、在家のときは俗服であり、出家すると袈裟となった。また鮮白比丘尼は、発願して毛氈を施した。その後は、生まれても生まれても、衣服を着けていたが、釈迦牟尼仏に会って出家したとき、生まれながらに着ていた俗服が、直ちに袈裟に変わった。和修尊者に同じであるとしている。衣は、在家の衣は俗服であり、出家すると仏衣である袈裟となるということから、仏祖として大和尚として正法を正伝して行くには、発心出家することである。それ故、住持三宝においては、出家し仏衣を着けた僧形を正しく伝えていくことも、外形的な面として重要なことである。

歴史上において、正法である仏法が、いつの時代、どの地域においても、具体的に実質的なものとして相伝して行くには、仏法僧の住持三宝がなければならぬし、相伝されているところには、必ず仏法僧の住持三宝があるといえる。その意味で、仏法が空論でなく大衆と関わりながら、内容的にも外形的にも実なるものとして未来永劫に正伝していくには、現前三宝を原初形態とする安居を継承していくことが大切である。また、住持三宝の僧宝が、安居により仏祖としての大和尚となり、正法を正伝していくには、坐禅と着仏衣の袈裟と十方三世の一切諸仏に礼拝する礼仏が重要であるといえる。特に礼拝は、この論文の最初に引用した「仏祖」の巻の劈頭語、「仏祖の面目を保任せるを拈じて、礼拝し相見す。仏祖の功德を現拳せしめて住持しきたり、体証しきたれり」とあった。仏祖を住持し体証するに「礼拝し相見す」とあるように、仏祖正伝の坐禅と仏祖相見の礼拝を両輪とすることが、仏祖である大和尚となり、歴代祖師大和尚としての意味もあり、「住持三宝」における仏祖としての僧宝の意義もあるといえる。

道元禪師における「仏祖」の一考察（神戸）

注

- (1) 『正法眼蔵』（三）「仏祖」一六〇頁。（以下、水野弥穂子校注・岩波文庫本『正法眼蔵』による）。
- (2) 『御抄』に「只仏向上の仏向上なる道理を以て如此住也」とある（『正法眼蔵藏解全書』第二巻・同刊行会発行）。
- (3) 『永平清規』「対大己五夏闍梨法」（『道元禪師全集』第六巻、春秋社刊）八八頁。
- (4) 『正法眼蔵』（二）「伝衣」二六二頁。
- (5) 『正法眼蔵』（二）「授記」八〇頁。
- (6) 『正法眼蔵』（三）「面授」一五六頁。
- (7) 『正法眼蔵』（二）「古仏心」一九九頁。
- (8) 『正法眼蔵』（三）「見仏」二三〇頁。
- (9) 大正藏經、第九卷、四三頁。
- (10) 『正法眼蔵』（二）「行持」二九八頁。
- (11) 道元禪師の「行持」が、如何なるものであるかは、拙論『「正法眼蔵」「行持」における「行持」考』（『閑花集』愛知学院大学短期大学部記念論集）を参照。
- (12) 『正法眼蔵』（四）「帛依仏僧」二五九頁。
- (13) 『正法眼蔵』（二）「辦道話」一一頁。
- (14) 「自受用三昧」の世界については、拙論『「辦道話」にみる「自受用三昧」の世界』（『愛知学院大学短期大学部研究紀要』第十三号）を参照。

道元禪師における「仏祖」の一考察（神戸）

- (15) 『正法眼蔵』(二)「辦道話」一一頁。
 (16) 『正法眼蔵』(二)「辦道話」一七頁。
 (17) 『正法眼蔵』(三)「無情說法」五五頁。
 (18) 『正法眼蔵』(二)「溪声山色」一〇八頁。
 (19) 『正法眼蔵』(二)「溪声山色」一〇九頁。
 (20) 『傘松道詠』(大久保道舟訳注『道元禪師語録』。岩波文庫本) 一三三頁。
 (21) 『正法眼蔵』(二)「即心是仏」一四九頁。
 (22) 『道元禪師広祿第二』(『道元禪師全集』第三卷。春秋社刊) 九〇頁。
 (23) 『正法眼蔵』(三)「洗淨」二〇五頁。
 (24) 『正法眼蔵』(二)「古仏心」一九九頁。
 (25) 『正法眼蔵』(二)「古仏心」二〇六頁。
 (26) 『正法眼蔵』(二)「辦道話」一四頁。
 (27) 『正法眼蔵』(二)「伝衣」二五六頁。
 (28) 『正法眼蔵』(二)「嗣書」三七六頁。
 (29) 『正法眼蔵』(二)「嗣書」三八九頁。
 (30) 『正法眼蔵』(三)「仏道」一一頁。
 (31) 『正法眼蔵』(二)「仏教」二九八頁。
 (32) 『正法眼蔵』(二)「辦道話」一九頁。
 (33) 『正法眼蔵』(二)「辦道話」三八頁。
 (34) 『正法眼蔵』(二)「辦道話」二二頁。
 (35) 『正法眼蔵』(二)「坐禅箴」二五二頁。
 (36) 『正法眼蔵』(二)「坐禅箴」二三九頁。
 (37) 『正法眼蔵』(三)「仏道」一五頁。
 (38) 『正法眼蔵』(三)「仏道」一六頁。
 (39) 『正法眼蔵』(三)「仏道」一七頁。
 (40) 『正法眼蔵』(三)「安居」四二二頁。
 (41) 『正法眼蔵』(三)「安居」四九九頁。
 (42) 『正法眼蔵』(三)「安居」四六一頁。
 (43) 『正法眼蔵』(四)「袈裟功德」一五〇頁。
 (44) 『正法眼蔵』(四)「袈裟功德」一三四頁。